

「本別農業 地域と歩んだ80年」

特別企画

第3回 本別中心部を彩った旧農協会館



令和7年10月 解体作業の始まった旧農協会館



令和7年4月末。
JA本館事務所の
新築移転に伴い、半世紀に
わたり歴史を刻んできた旧
農協会館が、その役目を終
え、同年10月からは解体工
事が始まりました。

現在、中心市街地では空
き家が目立つようになって
きましたが、旧農協会館が
建てられた当時は、本別町
に1万人以上が暮らし、ま
ち全体が活気にあふれてい
ました。

旧農協会館は、組合員や
職員にとどまらず、地域の
皆さんが気軽に集まる「み
んなの居場所」として親し
まれてきました。館内には
Aコープの他、食堂や美容
室、理容室なども入り、い
つも賑わいを見せていまし
た。

今回の特別企画では、旧
農協会館にまつわる懐かし
い写真やエピソードを交え、
関係者の皆さんにスポット
を当ててご紹介します。

(特別企画取材班)

賑わいと躍進の拠点 旧農協会館の記憶

1968年(昭和43年)9
月、第三代組合長理事・牧田
庄三氏のもとで旧農協会館が
誕生しました。落成式は農協
創立20周年記念式典と同時
に行われ、多くの組合員が集
い、盛大に祝われました。

建物は鉄骨コンクリート造
りの4階建てで、延べ床面積
は2428平方メートルです。移
転前のJAバンクが入っていた
1階フロアには、組合員の皆
様がかねてより強く望んで
いた、主食・食料品・衣料品
などの生活物資を扱うスパー
マーケット形式の店舗「農協
ストア」(後の「Aコープ」)

多様な個人商店が軒を連ねる
街並み(提供…町歴史民俗資料館)



が入りました。さらに、組合
員の生活向上を図る一環とし
て、食堂、理容室、美容室も
併設されました。中でも「農
協食堂」は大人気で、理容室
や美容室も多くの利用者で賑
わい、休む暇もないほどの繁
盛ぶりでした。

2階には事務所スペースを、
3階には会議室と和室を設け
ました。特に3階では昭和50
年代まで、組合員の結婚式や
披露宴の会場として多く利用
され、地域の大切な交流の場
となっていました。

落成式で配布された資料に
よると、当時の正組合員数は
1002人(915戸)でした。
令和7年10月1日現在のの



昭和43年、高度経済成長期に落成した旧農協会館

正組合員数は413人（268戸・法人含む）であり、当時の組合員数は現在の約3倍にのびりました。

当時は高度経済成長期の後半にあたり、本別町農協にとっても大きく躍進する10年間となりました。JAの70周年記念誌によると、第1次農業構造改善事業が一段落した後、草地改良や未墾地整備などの土地基盤の拡大に取り組みました。また、麦の生産対策事業や食用馬鈴しょの低温貯蔵倉庫の設置など、施設面でも充実を図っていききました。



新店舗内の商品陳列棚



新店舗テープカットの様子



創立20周年記念および落成式典の様子（「農協だより」第6号より）

町民に愛された 農協食堂

「農協の組合員や職員、地域の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。旧農協会館には何十年も通っていただけに、建物がなくなるのは本当に寂しいですね。」

旧農協会館の開館と同時に1階でオープンした「農協食堂」。親子2代にわたり、本別の庶民の味を守り続けてきた黒津澄子さんは、当時を振り返りながら、時折涙ぐみつつ語ってくれました。

澄子さんが20代で両親の手伝いをしていた頃、町の人口は1万4000人もいたそう。店内は常連客でいつも賑わっていました。塩ラーメン（500円）、しょうゆラーメン（600円）、半豚丼・半



黒津澄子さん

ラーメンセット（720円）

など、約30種類のメニューはどれも手頃な価格でボリューム満点。亡くなったご主人の篤さん（享年73歳）がラーメンなどの麺類を、澄子さんがご飯ものを担当していました。

通常営業のほか、出前や仕出しにも対応し、年末年始のオードブルの準備には「寝る間を惜しんで頑張りました」と澄子さん。開店当初から昭和50年代まで行われていた3階での結婚披露宴の料理も食堂が担当し、組合員さんの晴れの門出に花を添えました。

職員の中には、家族連れで食堂を利用する人も多く、閉店までの数年間はパートの星美恵子さんと3人でお店を切り盛りしてきました。

2019年（令和元年）6月末、篤さんの病氣治療を理由に食堂は閉店。澄子さんは「お客さんの『おいしい』の一言が励みでした。お金を払い忘れた帯広のお客さんが、後日手紙にお金を入れて送ってくれたことも、今では良い思い出です」と、笑顔で語ってくれました。

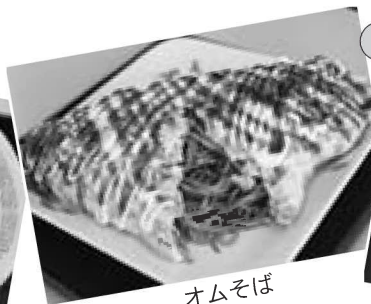
食堂で提供されていた料理



オードブル



あんかけ焼きそば



オムそば



人気メニューのAセット
（半豚丼と半ラーメン）

トピックス

昭和にタイムスリップ

昭和100年を節目に、町歴史民俗資料館1階では、企画展「ほんべつレトロ～昭和のお店屋さん～」が開催されています。会場では、懐かしい本別の商店街の様子を写真パネルなどで紹介しているほか、当時の生活道具や遊び道具も多数展示しています。

戦後復興や高度経済成長を経て、町民の暮らしを支えてきた雑貨店、衣料品店、食料品店、理容室などの個人商店を中心に、農協特集ではAコープの紹介や農協倉庫の看板なども展示しています。

この企画展は来年2月末まで開催されています。ぜひ足を運んで、昭和の本別の賑わいを感じてみてください。

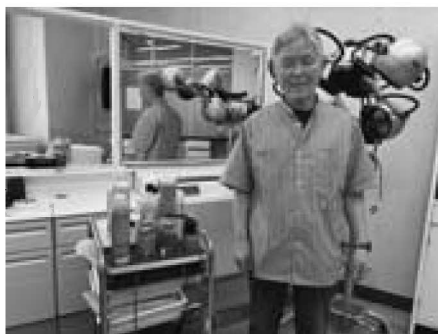
レトロ展では農協特集も



開店当初の農協食堂内
(営業前の静かな店内で、先代の黒津正治さんが仕込み作業をしている様子)



店主の土蔵啓一さん



農協理容室

組合員から
存続署名も

土蔵啓一さんは、妻のとし子さんとともに旧農協会館1階で、昭和47年10月から約53年間にわたり理容室を営んできましたが、新事務所への移転に伴い、惜しまれつつ閉店されました。組合員をはじめ、多くの町民から存続を願う署名が集まるなど、地域に親しまれた床屋さんでした。

啓一さんによると、最盛期には町内に同業者が20店以上あり、パートさんを含め4人体制で営業していた時は、1日で最大30人ものお客さんの髪を切っていたそうです。「とにかく忙しかった。昼休

みを取る時間もなくて、昼飯を食べられなかった」と、当時を笑顔で振り返ります。

一方で、人口減少が進むにつれてお客さんが減っていくのは寂しかったと振り返り、「これからは妻とゆつくりしたい」と第二の人生を楽しんでいます。

本別農業を トップセールス

近年、民間外交の重要性が叫ばれる中、佐野組合長は新津専務や民間企業社長らとともに2023年(令和5年)12月、中川郁子氏(当時衆議院議員)や農林水産省の幹部を訪ね、農業支援や農業関連企業の工場誘致について意見を交わしました。その際、議員会館で首相就任前の高市早苗氏と出会う機会もありました。佐野組合長は持ち前の行動力で本別農業を積極的にPRし、高市氏もフレンドリーに対応してくれました。

政治への働きかけとして、農協独自のルートや多様な人

脈構築がますます重要となっており、今後もトップセールスへの期待が高まっています。



東京の議員会館で佐野組合長が首相就任前の高市早苗氏と懇談し、本別農業や地域活性化をPR(2023年12月)

【予告】

次号では、町内で長年地域とともに歩んできた株式会社明治と北海道糖業株式会社にスポットを当てます。この2大工場がもたらした地域への貢献や、今後の展望・課題についてご紹介します。

ぜひご覧ください。